

ぼ めん かん もく
第133話「場面緘黙」

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士 郎

児童相談所で心理職として
仕事を始めた
ころのことだ。



場面緘黙と
言われる
小学1年生、
良太と会った。

家では普通に
話しているが、
学校では
全く話さない。



就学までは
集団生活の
経験はなく、

元気に野山を
走り回っていたという。



会ってみると

たしかに、
全く声を発しない。



過去には
機能的に声が出ないのではと
疑われたこともあり、



自宅での会話を
録音し、
関係者に
聞かせたり
したこともあった。



ならば心理的な原因だろうと、
私が関わるようになった。



同行して来た
クラス担任は、
「入学以来、全く誰も
声を聞いたことがない」と言った。



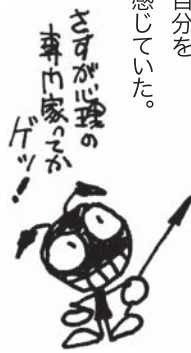
彼と二人、プレイルーム
(砂場や遊具を用意した
低年齢児用の
面接室)で
どう関わった
ものか
思案しながら、



「私にはこんなお話を
してくれましたよ…」



なんて
報告したがっている
自分を
感じていた。



そして同時に、
そんなことを聞かされる
担任の立場になったら…
とも思った。



だが、現実には
そんな想像に意味は
なかった。



遊んでは
いるが、
声は
全く聞けなかった。

それでも
楽しそうには
しているので、
ちよっと安心もした。



同伴の母親に、
「なかなか難しいですねえ」
と呟くと
黙って頷いた。



静かな面接を数回経たある日、
積み木を交互に高く積んで、
倒したら負けという遊びをしていて、
私が失敗をした。



難しいところに置こうとしたのではなく、手を滑らして失敗したのだ。



すると彼が小声で、「あほやー!」と言った。

残念ながら、「声、聞いたぞ!」と内心で興奮した。



そんなエピソードを報告しても、母親はあまり反応しなかった。



しかし後日会った担任は、面白がってくれた。



それから数日後、担任からの電話で、



「うちのクラスに啓介君という障害のある子がいます、



一年生同士ではなかなか、理解するのが難しいんです」

「その子の隣を彼にしまして、分らないことは良太君が教えてあげてと頼みました」



「うなずいてくれて、それ以来、



教室内外でよくやってくれているんです」



一ヶ月余り後、
担任が児童相談所を
訪ねてきた。



「それは良いですね。
私も引き続き、
プレイセラピーを続けます」
と報告して終えた。



良太君は
二人きりの時には、
啓介君に
小声で話しているといのです



「実はクラスの他の子たちから
聞かされたのですが



プレイルームでの様子に、
それほどの変化はなかった。



驚いた。

そして、なんでも
いいから喋らせたがっていた
自分が恥ずかしくなった。



多分、彼の声は、必要な
啓介君には届いているのだらうな
と思った。



私達は皆が揃って、
言葉を
多く
活躍
しなければ
ならないわけではない。

必要なメッセージを、
必要な人に出している。



しかし
必要な時には、